

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381084

研究課題名(和文) 沖縄の民俗芸能と青年集団に関する社会教育的研究

研究課題名(英文) A study of Community Education for the Folk Art and the Youth Group in Okinawa

研究代表者

山城 千秋 (YAMASHIRO, Chiaki)

熊本大学・教育学部・准教授

研究者番号：10346744

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、沖縄内外における沖縄コミュニティにおける若者の芸能文化活動に注目し、民俗芸能の継承過程から、文化の担い手となる若者の主体形成の内実を明らかにすることを目的とした。研究方法として沖縄県内の青年会に対する量的調査、ブラジルおよびボリビアの沖縄移民社会における民俗芸能と若者集団に関する質的調査、奄美群島の青年団と高校生による新たな文化創造の実践分析を行い「若者・祭り・共同体」の相互扶助・共同関係を明らかにした。

総じて文字化・マニュアル化できない民俗芸能は、他者との身体を介して伝承される社会教育独自の学習論であり、今後の地域再生において若者と地域社会を結びつける教育実践の一つとなり得る。

研究成果の概要(英文)： This article examines and analyzes the possibility of autonomous community by focusing on the cultural aspects of Okinawa. Music and dance provide a space in which the Okinawan people have been able to affirm their identity. Eisaa, a popular Okinawan folk dance and music, has traditionally been performed during the summer and Buddhist Obon. Youth associations have danced Eisaa historically, and currently, Eisaa has become a center of their activities. Music and dance are important parts of life in Okinawa.

The Okinawan immigrants in Brazil, they built a voluntary Kominkan to help each other and to colonize the Brazilian society. In South American countries, Okinawan performing arts like Eisaa can be learnt in the voluntary Kominkan or in adult studies. By learning the popular Eisaa, Okinawan identity link the widely scattered Okinawan immigrant communities. As described so far, this example of regional community of Okinawa holds important lessons for the globalization today.

研究分野：社会教育

キーワード：教育学 青年教育 沖縄学

## 1. 研究開始当初の背景

我が国では、教育といえば学校教育をイメージするように、今なお学校崇拜の傾向が強く、学校教育が中心的な位置を占めている。しかし、学校教育で教えられることは、日本国民としてのナショナル・アイデンティティの形成に寄与することはあっても、日本各地のローカルな知を伝承し、ローカル・アイデンティティを醸成するには、限界がある。

学校教育以外の教育機能を有する社会教育の領域では、子ども・若者の発達、成人・高齢者の学習における地域社会の役割を重視し、様々な学習集団、地域組織による教育実践から、地域社会に固有な教育機能を見いだしてきた。

しかし、今日の地域社会は、広がる経済的格差のなかで、教育だけでなく、貧困、雇用、人権、福祉、災害などの諸問題が増大し、地域社会で課題の解決を図るには、困難な状況にある。その地域社会も人口減少、学校統廃合により、コミュニティの維持が危機となっている。

こうした地域社会の様々な課題は、コミュニティの弱体化に伴い、国や自治体、専門家集団への依存を深めているが、一方で自ら課題を解決する主体の形成と地域再生の実践創出が求められている。

「地域で人を育てる」という当たり前の営みが継承できない地域が増えるなかで、改めて地域社会が内包する教育機能の再評価と地域再生の処方を示す必要がある。本研究は、日本の辺境にありながら、固有の歴史と文化を地域共同体で継承しつづける沖縄に注目し、特に若者と地域社会の相互扶助的な共同の実践と学びから若者の主体形成の内実を明らかにすることで、一つの処方箋を示したい。

## 2. 研究の目的

「沖縄の民俗芸能と青年集団に関する社会教育的研究」をテーマとする本研究は、沖縄内外における沖縄コミュニティにおける若者の芸能文化活動に注目し、民俗芸能の継承過程から、その文化の担い手となる若者の主体形成の内実を明らかにすることである。

教育の使命とは、文化の担い手を形成することにあり、それは特に青年期の主体・自立の確立に関わる課題である。そこで、沖縄の字青年会や県外・海外における青年集団・県人会青年部等が継承する民俗芸能が、若者の主体性に大きな影響を与えているとの視角から、その芸能の歴史的背景をはじめ、わざの習得過程や地域の祭祀行事への関わりなどの分析を行なう。そして、芸能を継承することと、地域意識や仲間づくり、主体形成を獲得することとの関連・意味づけを社会教育・生涯学習の手法を用いて論証する。

具体的な実証事例は、沖縄県内の青年会

に対する量的調査と、沖縄コミュニティが存在するブラジル連邦共和国およびボリビア多民族国の民俗芸能と若者集団に関する質的調査、そして、琉球弧の島々との比較研究として、徳之島の青年団と高校生による新たな文化創造の実践を取り上げ、「若者・祭り・共同体」の相互扶助・共同関係を明らかにする。

## 3. 研究の方法

本研究は、以下の研究方法に基づいて調査研究を行った。

(1) 民俗芸能を教育的に考察するための先行研究・調査関連資料の収集と比較分析。社会教育学および教育学における文献の週数のみならず、民俗学や人類学、体育学など関連研究分野にも依拠しながら、教育的分析手法を試みる。

(2) 沖縄県内の青年会に対する量的調査の実施と分析。教育委員会、市町村青年団の協力を得て、郵送もしくは定期総会等の機会を利用して、字青年会へアンケート調査への協力を得た。調査できた青年会は、17市町村の90青年会である。また、奄美群島の青年団では、3市町村連合会と3字青年会から回答を得ることができた。なお、宜野湾市に関しては、青年団OBによる『宜野湾市のエイサー継承の歴史』(榕樹書林、2015年)が刊行され、当事者によるエイサー分析の視点が含まれており、本研究に示唆を与えた。

(3) 海外の沖縄コミュニティにおける若者と地域共同体の関係を明らかにするために、ブラジル連邦共和国とボリビア多民族国の沖縄移民社会の質的調査を実施した。ブラジルは、移民からすでに100年を経ており、世代間循環の視点から、そして琉球政府時代に入植したボリビアでは、学校教育における沖縄文化伝承の視点から分析を試みた。

(4) 琉球文化圏に属しながら、異なる文化形成をなしてきた奄美諸島における青年団運動と文化伝承の相関についても、実地調査を行った。

以上のような先行研究、量的・質的調査という一連の研究活動を通して、沖縄・奄美・海外の沖縄人・沖縄県系人が継承する民俗芸能の役割と若者の主体形成過程について考察する。

## 4. 研究成果

### (1) 沖縄の字青年会と民俗芸能

本研究では、沖縄の各青年会がどのような構成員で日頃活動をしているのか、民俗芸能についてはどのような芸能を継承し、いつ頃練習を行い、曲目や役割属性、わざの伝承がどうなっているのかをアンケートを通じて、実態を明らかにすることを試みた。

2013年から2015年にかけて、青年会が参集する祭りや公民館などへの訪問調査の他

に、沖縄県青年団協議会、市町村の教育委員会を通して、郵送による調査を実施した。回収できた字青年会の地区別内訳は、北部地区12、中部地区38、南部地区11、先島地区29、合計90青年会である。

まず会員数は、「10～20人」が46.5%、「20～30人」23.3%となっている。そのうち女性会員は平均6.8人、学生(中学以上)6.6人、失業者はわずか0.7人であった。最年少は平均19.4歳、最年長は32.4歳で、活動の中心は、成人が担っており、高校生も巻き込みながら異年齢による集団が形成されている。

沖縄の民俗芸能のうち、旧盆の行事に披露されるエイサーをやっているかどうか尋ねたところ、「している」64.4%、「していない」34.4%で、エイサーが盛んな中部地区の青年会が多くを占めていることもあるが、今日では、先島地区でもアンガマの他に、エイサーも伝承されており、旧盆行事が青年会活動の中心的行事に定着していることが分かる。

練習の場所について複数回答で聞いたところ、「公民館」72.4%、「公園・広場」29.3%、「学校のグラウンド」13.8%、練習時間は20時から22時が最も多く、練習期間は、平均して5月頃から9月頃まで、週4回練習していることになった。旧盆が終わった後も、市町村のエイサー祭りやイベントなどへの出演のため、約半年近く練習を続けていることになる。

エイサーに使用する太鼓は、複数回答で「大太鼓」91.3%、「締太鼓」72.4%、「パーランクー」29.3%、「ウスデーク」1.7%となっており、締太鼓を使用するエイサーの割合が高い。パーランクーエイサーは、うるま市(旧与那城町、勝連町)に多い。

エイサーの役割属性を平均値で示すと、以下の通りである。「大太鼓」4.7人、「締太鼓・パーランクー」13.4人、「手踊り(男)」1.9人、「手踊り(女)」7.8人、「チョンダラー」3.0人、「旗頭」0.9人。エイサーは、多くが太鼓を使う芸能であるが、名護市世富慶青年会では、昔ながらの手踊りエイサーを継承している。

エイサーをしていない青年会では、豊年祭で披露される芸能が継承されている。たとえば、棒術や獅子舞、琉球舞踊などがあり、宜野座村宜野座区では、県指定無形民俗文化財の「京太郎」、読谷村高志保の「馬舞」、八重山諸島では、アンガマや旗頭などが特徴的である。

最後に「エイサーを含む民俗芸能を地域の子ども会や子どもたちに教えているか」どうか尋ねたところ、「教えている」41.1%、「教えていない」11.1%、「かつて教えていたが今はやっていない」12.2%、「検討している」14.4%、無回答21.1%だった。民俗芸能の後代への指導は、組織・活動の存続と関わって重要な意味をもち、地元の学校と連携して、芸能指導を行っている青年会もある。

青年会の存在は、地域の民俗芸能を継承す

るだけに止まらない。中部のある青年会では、次の通り、地域の担い手として期待されて復活した事例もある。

2011年、東日本大震災及び度重なる沖縄の台風の影響をきっかけに「高江洲にも若者のコミュニティを」という自治会の呼びかけで、青年会発足委員会が立ち上がり、2012年4月より青年会として活動している。

また、北部のある青年会では、若者の減少による青年会活動の停滞を避けようと、区を挙げて取り組んでいる地域もある。

青年会会員として参加してくれる方が少ないため、保存会、成人会、老人会、婦人会の協力の下、エイサーを行っている。旧盆の時、区民の方も踊りの輪に入ってくれるので、踊りの人数は、多い時は100名以上になり、盛り上がる時もある。

質的調査から明らかになったことは、勤労者の若者男女が、地域の伝統行事である旧盆に向けて、約半年にわたり民俗芸能の稽古を集団で行う。芸能を披露することは、区民から直接的に評価を受けることである。そのため、伝統の創造が求められ、若者を励ます機会ともなっている。

こうした若者と共同体との直接的な出会いは、芸能を媒介にすることによって、無意識的な教育作用を及ぼすことが分かる。

(2) 沖縄移民社会における芸能と沖縄人アイデンティティの形成

沖縄は、戦前から毎年多数の移民を送り出し、人口に対する出移民数も圧倒的に多かったため、「移民県」と称される。そこで、二つめの研究視点として、移民社会における沖縄人の芸能文化を、アイデンティティとの関係で考察した。移民社会において、芸能がアイデンティティの共有や確認に大きな役割を果たすことはいうまでもないが、異民族に囲まれた社会だからこそ、彼/彼女らは複数のアイデンティティを持ちながらも、沖縄独自の文化的均質性や言語的な自己充足性を維持する装置として、常に琉球芸能を生成させてきた。

まずは、ブラジルの沖縄移民社会における文化伝承の諸相を、次のように整理する。すなわち、琉球芸能の組織化と伝承、祭りの場としての支部会館、琉球芸能の変容と受容、である。これらの諸相から、ブラジルの移民社会における沖縄人という主体形成の要因について考察を行った。

まず、琉球芸能には、音楽や舞踊、太鼓の習得を通して、沖縄文化を伝承する大きな役割があった。そして、支部会館には、様々な祭りや行事が行われ、それらに参画することによって「沖縄」を内面化し、沖縄人としての共同意識を育んできた。しかし、移民から一世紀を経て、後続移民が期待できない今、沖縄文化は、ブラジル社会への変容と受容の過渡期にある。

このような異文化接触による沖縄文化の

伝承の力強さと意識形成に与える影響の大きさは、「日本のなかの沖縄」では、表面化されにくく、また意識されにくい。ブラジルにおけるエスニック・マイノリティーの沖縄文化は、母県・沖縄と強固につながりあうことで、沖縄系人のアイデンティティ形成に作用を及ぼしている。それは、沖縄的空間が現出する祭りや年中行事の場と時間に幼少期から関与することで、沖縄系二・三世においても体験を通して獲得した「沖縄」的なものを内面化する。また、支部会館の活動は、沖縄人としての共属感覚を育む機会となり、この感覚が、異質な他者との関係性のなかで、自己形成にまで高められていくという可能性を生むことになる。

こうした実践を連綿と連続してきたことが、沖縄系二・三世に、琉球芸能を実践する基礎的な条件を与えてきたのであるが、それが今、琉球芸能の伝承が非沖縄系へと展開している。支部活動をはじめ、支部会館の運営・維持に関しても、会員の枠を非沖縄系へ広げようと検討する動きも見られる。

次に、第二次大戦後の米軍統治時代に沖縄からポリビアに渡った移民に焦点を当て、60年にわたる移住地への定着過程や自治・文化活動の内実、そして琉球芸能の伝承過程の考察から、沖縄人アイデンティティの形成を検討した。

ポリビアへの移民は、他国と比較して以下の4つの特徴がある。まず、米軍統治時代に琉球政府と琉球列島米国民政府が共同で募集した計画的集団移民であったこと、募集にあたり各市町村ごとに一次選考が行われ、優秀な人材が全島から選抜されたため、離島を除く各市町村から送出していること、オキナワ移住地が農業基盤の安定化と人口増加によって、1998年に「オキナワ村」という自治体としての自治権を獲得したことである。

最後は、沖縄県が1986年から2012年まで「ポリビア国沖縄県民移住地教育施設への教員派遣事業」によって、沖縄の現職教員2人を移住地の学校へ派遣したことである。本事業によって派遣教員が移住地の教育に与えた影響は大きかった。特に移住地における沖縄の歌・三線、エイサーなどの琉球芸能は、派遣教員によって「正統的」に伝承され、本家沖縄のわざを直接学習できる機会を子どもたちだけでなく、移住地の成人学習としても普及した。

南米各国では、琉球芸能は、移住地の公民館や会館などの社会教育の場で伝承されるものであるが、ポリビアでは、学校教育が代替することで、琉球芸能の伝承を可能にしているという、他国の移民社会とは異なる実践が行われている。

このようにオキナワ移住地は、自治と文化教育を沖縄人の共同性によって築きあげ、「もう一つの沖縄」として定着・発展してきた。

オキナワ移住地には、地区ごとに地域青年会が結成されており、高校生から20代の若者で構成されている。結成された年は定かではないが、古老の話によると入植した当初から青年会として組織的な活動を行っていたという。青年のほとんどが移住地の学校の卒業生であり、高校生や大学生は週末に帰省した時に参加している。

第一地域青年会は、18歳～23歳の若者、約50名で構成され、その半分は女性である。主な活動は、スポーツ活動がメインで、その他オキナワ連合青年会と日ボ協会の事業への参加となっている。

サンタクルス市には、多くの若者が参加する琉球国祭り太鼓のポリビア支部が活動している。週3回の稽古を行い、8月のオキナワ移住地での豊年祭りや10月のサンタクルス市の盆踊りなどで披露、ポリビア人の祭りに呼ばれることも多い。

派遣教員がもたらした琉球芸能は、青年会や琉球国祭り太鼓の支部活動としてポリビアの地に定着してきた。琉球の音階や言葉、衣装に振り付けという表象化された沖縄を身体を通して学ぶことは、移住地の二・三世に対して沖縄を体現する唯一の手段となっている。学校教育での琉球芸能に関する学習の素地の上に、青年会の芸能活動が発展的に展開されている。このような身体的な学習を経て、沖縄人アイデンティティは体得されるのである。

### (3) 奄美群島における民俗芸能

本研究では、沖縄県下のシマ社会における若者の芸能文化活動を対象としてきた。一方で、琉球弧という同じ文化圏に属する奄美群島の社会教育研究は、古賀 皓生・上野景三による米軍統治下の社会教育研究や、小林平造による与論島の自治公民館制度研究のように、研究蓄積が少なく、また琉球弧として沖縄との比較や統一的に捉えた研究は、管見の限り見当たらないのが現状である。

奄美群島のなかでも琉球文化と薩摩文化の混在が見られる徳之島は、集落構造的には琉球文化との共通性が色濃く残されており、沖縄研究と同様な手法で調査を行った。まず、各集落には、字公民館があり、子ども会・青年会・婦人会、老人会が集落単位に組織されている。集落史という、沖縄の字誌づくりも行われており、東京や大阪、鹿児島に郷友会があり、島単位・小学校区単位で組織されている。

徳之島の若者は、高校まで教育を受けた後、ほとんどが進学・就職のために島を離れる。青年会に参加する若者も、一度は島外に出てUターンした経歴をもつ。天城町の連合青年団は、しばらく活動を停止していたが、「国民文化祭がごしま2015」を2年後に控えた2013年9月に青年団が再組織された。青年団が文化祭でめざしたのは、沖縄で高校生が中心となる創作組踊「肝高の阿麻和利」であり、それを手本にして、徳之島独自の「島口ミュ

ージカル-MUSUBI」を1年かけて創作した。町内の中・高校生と共に「結シアター手舞＝てまい＝」を結成し、沖縄「あまわり浪漫の会」のダンスや演技指導を受けながら、中・高校生をメインに、青年団は裏方に徹することで共同のミュージカルを完成させた。

青年団は、身近な歴史の発掘をはじめ、方言文化、島唄、集落に伝わる伝統芸能の継承という学習を通して、中・高校生に島へのアイデンティティを、身体を介して伝えていると解釈できる。こうした取り組みは、沖縄各地でも島の歴史の再評価と文化伝承の意義をもって積極的に取り組まれており、徳之島においても、同様な教育実践が島の人々に共感をもって受容されたことが、注目される。

日本の中山間地や離島では、若者の人口減少と高齢化が進んでいるが、「十八の春」までに、島の文化や歴史を、社会教育を通していかに伝えるか、また青年団の若者も、文化の担い手としていかに育てるか、地域の持続可能性と関わって重要な要素となる。

#### (4)まとめ

本研究は、沖縄の民俗芸能と青年集団のかかわりに注目し、地域社会の教育機能の析出と主体形成について論究してきた。本研究で明らかになった点は以下の3点である。

まず一つは、民俗芸能には、音楽や舞踊、太鼓の習得を通して、沖縄文化を伝承する大きな役割があることである。沖縄文化を表象する各地の民俗芸能は、共同体固有の文化財として、主に若者を中心に伝承されてきた。若者は、青年会という青年集団に加入することにより、地域の年中行事に欠かせない芸能へ携わる。わざの獲得過程には、地域文化とのつながり、多様な他者とのつながり、そして身体化された学習が内在化されている。すなわち、文字化・マニュアル化できない民俗芸能は、他者との身体を介した共同学習によって伝承されるものであり、社会教育独自の学習論であると言える。こうした共同学習は、若者の地域に対する主体性を醸成することを可能とする。学校教育では教えられない、社会教育固有の学習論であり、琉球文化圏では、特に民俗芸能が重要な文化的要素となる。

二つめは、沖縄人アイデンティティの継承のために、芸能や文化を学ばせることで意識を高めようとする動きは、沖縄だけでなく、異文化との接触・同化の激しい移民社会のなかでも意識的に行われていることである。ブラジルの沖縄移民社会では、支部会館という公民館が拠点となって、沖縄コミュニティを持続可能としてきた。一方の沖縄は、言葉や生活習慣をみても、このままではこの島が単なる日本の一地域となることは容易に察する。沖縄人としてのローカル・アイデンティティは、ブラジルの事例でも明らかのように、後天的に学習によって獲得されるものである。移民社会には「本当の沖縄が残っている」という言説は、移民社会の文化伝承を軽んじてきた本家・沖縄の本音ではないか。海外の

沖縄人が、自らのルーツに誇りを持ち続ける姿勢に、我々は、地域再生の鍵として学ぶべきことは多い。

三つめは、これまでの地域づくりが、産業・経済・定住を重要な政策課題にしてきたが、教育がそうならなかった構造的課題に対し、「教育による地域づくり」という枠組みの転換を指摘したい。若者と日本の地域社会は、往々にして躍動感を失った、将来に展望を持っていない存在として長らく語られてきた。しかし、今日の地域再生には、こうした中央を目指さない地元志向の若者や、地域で身の丈に合った生活をしたいと望む人々が鍵となってくる。生活文化を豊かにし、互惠的・共助的關係を構築するために、教育・文化の台頭が求められるのである。沖縄に「限界集落」が少ないこと、どんな過疎地であろうとも青年会が活躍しているという事実は、産業や経済では代替できない、文化的価値がそこにあるからではないか。「若者・祭り・共同体」は、これからの地域再生において、新たな可能性を生み出すものと期待できる。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

山城千秋、沖縄シマ社会の自治と共同の構図、東アジア社会教育研究、査読無、第18号、2013年、p.50-62。

山城千秋、ポリビアのオキナワ移住地における琉球芸能の伝承、アイヌ民族・先住民教育の現在、査読有、第58巻、2014年、p.137-150。

山城千秋、沖縄の青年団と復帰闘争 - 戦後沖縄青年運動史の証言から、東アジア社会教育研究、査読無、第20号、2015年、p.183-194。

山城千秋、A Transmissão da Arte de Ryūkyū nas Colônias Okinawanas da Bolívia、Muribushi、査読無、1、2015年、p.153-175。

山城千秋、Diversos Aspectos da Preservação da Cultura na Comunidade Okinawana no Brasil、Muribushi 査読無、2、2016年、p.151-172。

〔学会発表〕(計2件)

山城千秋、The Autonomy and Culture in Okinawa、The 13th International Conference “Lifelong Learning Continuous Education for Sustainable Development”、2015年5月29日、Pushikin Leningrad State University、St.Petersberg、Russia。

山城千秋、ブラジルの沖縄移民社会における文化伝承の諸相、第62回日本社会教育学会、2015年9月19日、首都大学東京。

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

山城 千秋 (YAMASHIRO Chiaki)  
熊本大学・教育学部・准教授  
研究者番号：10346744